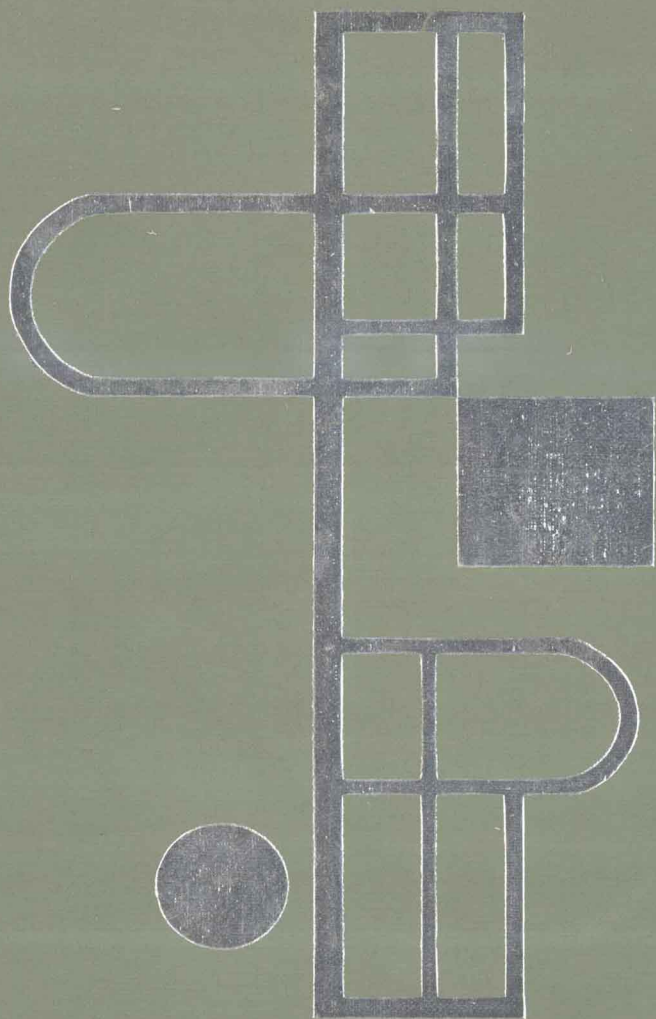
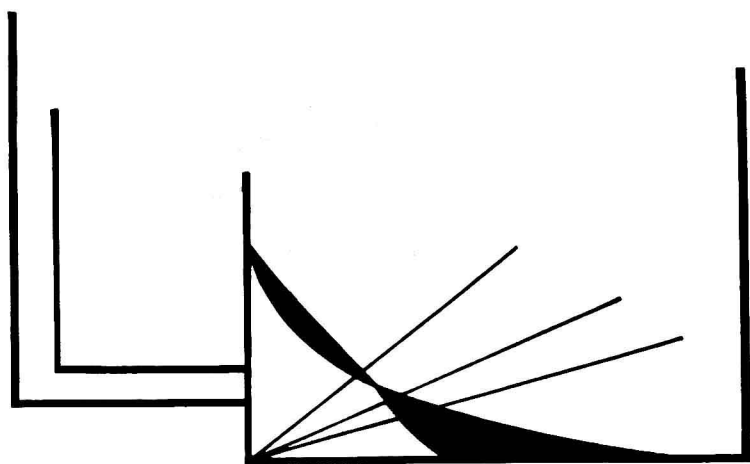




高見順 集

新選 現代日本文學全集

20



筑摩書房版

高見順集

昭和三十四年三月九日 発行

著者 高見順
たかみ じゅん

発行者 古田晃
東京都千代田区神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

発行所 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版株式会社 精興社
印刷株式会社 矢島製本所
製本有限会社

高見順集 目次

今ひとたびの	五
わが胸の底のここには	四六
この神のへど	一四〇
都に夜のある如く	二四二
乾燥地帯	三五〇
インテリゲンチア	三六五
甘い土	三九九
高見順の人と作品	四〇〇
解説	四一七
	中野好夫

装帧

恩地孝四郎
恩地邦郎

高見
順集

あらざらん此の世の外の思ひ出に
今ひとたびの逢ふこともがな

その一

またしても、ここへ私は来た。

ここへ私は、この前の日曜も、そしてまたその前の日曜も——そのひとに今ひとたび会いたい一念で、そのひととかつて約束したこの時刻に正確に、あたかも犬のような……と恐らく人に笑われるかもしれない、信じ切つて疑われない愚直さで、いそいそとやつて来たのだが、待ち焦れたそのひとは……。そのひとと、ここで、悲しい、別れたくない別れをしてから思えばながい年月が経つていること故、私とのあの固い約束も、そのひとは或は忘れてしまったのだろうか。いいや、そんなことは無い。そんなことはあり得ない。ここで、——お互いに生きていたら必ずまた会おうと言つたのは、他ならぬそのひとだつたのだから……。

「お約束しましょう。日曜日の、この時刻に——ね、いいこと？」

堰き上げる涙を抑えて、とぎれ勝ちの声でそのひとはそう言つて、そのひともその白いやさしい手に小さな時計をつけているのに、わざわざ私の腕時計を眼の前に出させて、

「四時十分ね。日曜日の四時十分。……」

私の手をとつたその人の手は震えていた。そうして私の手も震えていたから、私にはそのひとの震えと自分の震えとの区別が、そう言えばそのひとの悲しみと私の悲しみとの区別もつかなくなつたが——。

「——きつとまたお会いできるわね」

そのひとの言葉は、約束を忘れないようにと改めて私にたしかめる意味のものではなく、その時ポケットに赤紙の召集令状を持つていた私に、生きて必ず帰つてくれと、人の眼さえないかつたら慟哭したに違いない、そうした切ない祈りの言葉なのだつた。

どのような戦場がそしてどのような運命が私を待つているか、またどのような変転がそのひとの身の上になるか、いずれも私たちには分らなかつた。でも、お互いに音信は絶やすまいと私たちは誓つたものの、しかしその誓いも私たちの心に反して、私たちには如何ともしがたい外的の暴力のためにあるいは不可能になる場合もあるかもしれないで——、（思えば、そういうむごい力にさいなまれ醜弄され続けてきた私たち、——私たちの哀れな恋なのだつた。）

そういう場合は、つまり心ならずもお互いにたよりをかわせないで、しかも幸いに生き延びら

れた場合は、この最後の別れの場所、ここ——銀座の一角で必ずまた落ち合おう、巡り会おうと重ねて誓ひ合つたのだつた。

その誓い、そのひとの方から言い出した誓いをそのひとが自分から破るうなどは、——そのとき恐れた通りの音信不能に私たちは陥つたものの、そのひとが自分から自分の言葉を忘却のなかに捨て去るうとは、夢にも考えられないことだつた。生きていたら必ずそのひとは、こ

こへ、その美しい、懐しい、それ故何か私には悲しい姿をふたたび現わすに違いないのだ。そうだ、生きていたら……。

今日もまた、まだ、そのひとは来ないのだが、もしや……。いいや、そんな、——この私が生きて帰つてきたというのに、そのひとが、生きてないなんて、そんなことがあつていいものだろうか。

けれど、この銀座の惨憺たる変りようを見ると、ともすると不吉な想いが私の胸に来る。私のこの十年年にわたる不幸な恋は、やはり不幸なままで終るのだろうか。そんな、そんな……。あなたとやつと結婚できるとおもつたら、——あなたは戦に連れて行かれておしまいになる。ああ、なんということでしよう」

そのひとの声が私の耳に、はつきりと聞える。その時の銀座は、こんな廢墟ではなかつた。

「いつも、こうなのね。いつもこうだつたわね。わたくしたちは……」

結ばれようとすると、外の力が、暴力が、私

たちを引き裂いた……。

★

不幸な、——私は自分の気持としては、必ずしも不幸と感じてはいなかったけれども、私の友人たちの等しく言うところでは、不幸な、私の恋の、最初の芽生えというのが、やはりこの銀座でのことであつた。しかも今、私がそのひとを待つて立つている、この銀座の一角の、現在は焼けて無いレストランでのことであつた。さらにそのひとと、私が応召の身となつたにつけて別れの食事を共にしたのも、——いや、詳しく言えば、結婚の打合わせをしようとして会つたら、それがはしくも別れの食事になつたのだが、それもまたこのレストランでのことであつた……。

その夜、——そのひとの姿が初めて私の心に焼きつけられた、忘れられないその夜、私は珍しく大学の制服を身につけていたのだが、大学生の私が学生服を着ていたのを、珍しくというのは、——そうだ、間もなく自ずと明らかにせられること故、説明に手間取る必要はないだろう。大学生でありながら、制服を着てないひとりの友人と、その時、私は一緒だつたが、レストランの椅子につくなり、

「実に不愉快な愚劣な雰囲気だつたね。あれは一体どういふんだね」

そういう彼は首を左右に振りながら、あたかもそうして交互に足許に力を入れて愚劣な雰囲

気なるものを踏み潰そうとでもしているかのようであつた。どこの訛りか、「——だね」というのだが「——だにイ」と聞える。

とある素人劇団の芝居を見ての帰り、このレストランにコーヒーを飲みに寄つたのだが、芝居へ誘つたのは私であつたから、

「——すまん」

「君は何も謝ることはない。君のシンバがやっている芝居だというから、実はちよつと期待して行つたのだが、なんの意義があるのかねえ、あんな芝居をやつて……」

今からするとやや滑稽にも聞える言葉だが、私にはしかし懐しい。シンバ——これも、あなんと、懐しい言葉だろう、と言うのも、十年前、まだ大学生だつた私は、左翼の非合法運動に加わつていたので、(今の私からすると、まことに隔世の感がある。)その頃、運動資金に毎月若干の金を秘かに寄附してくれていた、蒲原という私の学友、つまりこれがシンバというものでつたが、その学友が素人劇団を組織し、脚本の選定から演出、経営までひとりでやつてのけて、その第一回公演を帝国ホテルの演芸場で行つた。私にその招待券をくれる時、蒲原は鼻をくふんといわせて、こう言つたものだった。

「階級的にはまつたく意味のない芝居だし仕事なのだが、これで儲けようと思うのだ。そうして運動にその金を提供するよ」

蒲原はそして顔を赧らめた。

その頃の私は、——法学部に籍を置いていた私は、芝居などというものに何の興味も惹かれない者だつたが、そして官憲の眼をくぐつての連絡や会合でそんな暇も、そんな心の余裕も無い身体だつたけれど、公演の夜は、たまたま時間があいていたので、ひよつと、魔がさしたような感じで、ついぞ足を入れたことのない帝国ホテルの裏側の演芸場へ行つて見る気になつた。行つて、私は、やはり来るのではなかつたと悔いた。当時の言葉で言えばブチ・ブル的な「愚劣」な華やかさが、演芸場へ一歩足を踏み入れるとたちまち、さながら私の嫌いな(その頃、大嫌いだつた)むつと胸の悪くなる酒の匂いか何かのように私をつつんだ。私は——左様、さつき、犬の例を出したから、ここでもそれを使えば、花園に迷い込んだ飢えた犬のような戸惑いを感じるとともに、なんともいえない腹立しさ、食物を求めて花を与えられたそれというのでなく、誇らかに咲いている花そのものに對する腹立しさといったものに捉えられた。

「やあ、これは、これは」

もともと派手なこと好きな蒲原が、自分の手で派手なこういう場景を醸成し得たことにすつかり有頂天になつた上氣した顔で、受附に立つていた。内心は得意で、しかも表面は逆に、へり下つたマネージャー気取りの猫撫で声で、

「やあ、ようこそ」

一種の癖みと今の私には顧みられるが、そんな蒲原にもむかついた。

廊下には、目もくらむような色彩と肉体とが渦巻いていた。着飾つた若い女が全く花園の花のように、あちらこちらに群つていて、

「あら、フィアンセも御一緒？」

「あの方、Aさんのアミ？ ハンサムねえ」

そんな会話が交わされている。唾棄すべき軽佻と私は眉を寄せたが、実はその聲響には、そうした美しなお嬢さん達と何のかかり合いもない焦躁が手伝つていたことに自分では気付かなかつた。

私は心の中で呟いていた。失業と飢餓が街に溢れているとき、こんな百花撩乱が許されているものなのだろうか。腹立しさの余り、外へ飛び出そうかと思ひながら、その腹立しさが不思議にまた私を、もつと腹立しい客席へと導いて行つた。

やがて幕があがつた。

今はその舞台でどんな芝居が行われたか、まるで覚えていない。ただ、旅役者の群を抜つたフランスの戯曲で、諷刺が下手なせいか科白も生硬なら、演技も素人俳優のため拙劣なものだつたという以外には覚えていないのであるが、今もつて忘れないのは、忘れられないのは芝居そのものと何の關係もない舞台裏の音楽と、——そしてその音楽とともに舞台上に現われたそのひとの姿である。

私は退役軍人を父に持つた、厳格な、というよりむしろ偏狹で固陋な家庭に育てられたために（私が学業を放擲して非合法運動に走つたの

は、ひとつは自分の家庭に対する反逆からでもあつた。）——音楽とか女性とかいつたものかはおよそ絶縁された、いわば修道僧のような、それまでの生活であつた。さらに左翼運動に身を投じてからは一層ストイックな日常に入つて

いた。その私に、甘美なメロディは、ついぞ私の知らない甘美さであつた故か、たとえば砂糖に飢えた口がいきなり甘いものをふくむと、唾腺のあたりに締めつけられるような痛みを覚えるものだが、あたかもそれに似た苦痛を与えないではおかなかつた。そのとき、それはなんとという曲か、左様なことは皆目分らなかつたのだが、のちにハイドンのセレナーデであることを知つた。今の私はそのメロディをいつでも口ずさむことができる。戦場で、どんなに私はそのひとを想つては、秘かにその懐しいメロディを口ずさんだことだろう……。

そのセレナーデとともに——、ちようど、音楽の波に浮んだ花のような感じで舞台上に現われたそのひとの姿がまた私に同じような痛烈な衝撃を与えたのである。まさにそれは衝撃であつた。

「^{暁子}さん、お綺麗ねえ。……」

近くの若い女性の間から、そういう讚美の囁きが聞えてきた。私はその美しいひとが暁子という名であることを知つた。同時に、私の衝撃というのは、そのひとの「綺麗」なこと、そのひとの美に私が打たれたものであることを、私は近くの座席からの囁きによつて、初めてそれ

と知らされたのであつた。何か言葉弄していかの如くに取られるかも知れないが、その時の私は、事実、私の衝撃が何によつて与えられたものであるかを自分で理解することが出来なかつたのだ。

ただもう、はつと心を打たれた。痺れるような苦痛であつた。そしてその苦痛は、衝撃の去つたあとでも心に残り、いつまでも消えなかつた。むしろ強まる一方のようであつた。私のかつて経験したことのない、生れてから初めて経験する苦痛であつた。

それは、そのひとの美に打たれたためだといふことを私は知らされたのだが、そう知つたのちも、ではそのひとのどこが何が美しいのか、——私をかくも激しく打つた美というのは、そのひとのどこに潜んでいるのか、そのひとのどこからそうした美が放射されたのか、そういうことになつてくると、またしても私には分らなかつた。

そのひとそのものが美そのものであつた。私のうちに奇怪な錯裂が生じた。私はその雰囲気を、その芝居を、そのあらゆる存在を、愚劣なものとして軽蔑し憎悪していた。その点「ね」を「に」と発音する友人と同様であつた。その感情から（正確に言うならば、理論的感情から）私はいわば愚劣な花園の中に咲いたそのひとの美をも軽蔑し憎悪せねばならなかつた。私はまさしく軽蔑し憎悪した。かかる有閑階級の美なるものに生れてはじめての衝撃を受けた

自分をも、私は軽蔑し憎悪した。しかし……。

しかし、私の心はそうした軽蔑や憎悪ではもはや如何ともしがたい傷をたしかに負つてしまつてた。その心の傷を私は一方で認めまいと努めながら、一方では甘い痛みで惹かれる自分を見出さなくてはならなかつた。傷を認めることのうちに私は喜びを感じていたのである。

その奇怪な錯裂は、銀座のレストランに入つてからも、消えることなく私のうちにひしめいていた。

「自慰だ。プチ・ブルの自慰だ」

吐き出すような友人の言葉に私は充分頷いていたが、私の思いは、その明快な公式的な論断の正しさよりも、どうしていいか訳の分らない、理窟で片附けられない内部の傷にとらわれ勝ちであつた。

今までついで恋の経験とて無い私ではあつたが、私の負うた心の傷は、私の心に傷を負わせた当の相手、そのひとによつてしか癒されないうことを本能的に知るのであつた。心の傷は、私の理性も何も無視して、そのひとのやさしい治癒の手を祈求するのであつた。

——今一度、会いたい。

会つてどうするといふのだ。私の理性は私を叱る。

——ただ、会うだけでいいのだ。

お前は、と理性は言う。非合法運動に身を献げた者ではないか。地下にもぐつてゐる身体ではないか。そんな普通の学生のような恋愛の許

される身体ではない。まして相手はブルジョア娘ではないか……。

こんな銀座のレストランでコーヒーなどを飲んでゐるといふことさえ怪しからんと、その頃の私らしいストイックな自責を覚えて、椅子から立ち上ろうとした時であつた。

賑やかな談笑の音が階段を昇つてくると思つたら、蒲原の顔がひよつこり現われ、つづいてそのひとの顔が！

(——ああ)

色さまざまな花に包まれたそのひとの顔、——

——私は思わず息を呑んだ。

なんとという美しさだつたらう。

私は初めてそのひとの美を、そのひとの顔のうちに見た。具体的な美を初めて認識できた。

私は初めてそのひとの美しい顔を、はつきりとわが眼におさめたのであつた。それまではただ漠然としていたのがここで初めてビントが合つて鮮やかに掴めた、そんな感じであつた。

劇団の主だつた人たちが、公演の喜びと興奮に駆られ、そのまま別れるのが惜しい気持ちから、銀座へと出てきて、ここへ寄つたのだつた。誰

かから贈られたものらしい大きな花束を、胸にかかえたそのひとは、座の人々から守られるようにしてテーブルについたが、椅子に腰掛けても花束をかかえたまま、その顔を花の間にはさんでた。舞台の印象よりも遙かに若い、むしろ子供っぽい顔であつた。そのひとは舞台では、だんだんと人氣がなくなつて旅廻りの群に落ち

て行く敗残の役者の恋人に扮してゐた。自らも女優で、男と一緒にどこ迄も流れて行く純情の女であつた。そうした役のせいとか、やや大柄な身体のせいとか、私よりももしかすると齡上かもしれないと見てゐたのだが、素顔は女学生のようなあどけなさだつた。

蒲原が私を見付けて、側へ来て、

「おかげで大成功だつた」

私の手を取つて握りかねまじき勢いだつたが、すぐ自ら照れた風に、くふんと鼻を鳴らし、

「芝居というのは、君、不思議な魅力を持つてゐるものだ。素人芝居なんて馬鹿馬鹿しい、下らんことだと軽蔑しながら、ずるずると曳き摺られる。泥沼のようなものだね。……」

何につけても彼はいつもこういつた調子で、こういう調子の彼の言葉を好まない私はいつもいい加減に聞き流してゐるのだつたが、その時は、なんだか私の心を言い当てられたような感じで、

(軽蔑しながら曳き摺られる不思議な魅力……？)

私はそのひとの方に眼を移した。と、——そのひとは、花の間から私をじつと睥睨してゐた。

芝居の疲れからか、それともそのひとの性質なのか、まわりの人たちが傍若無人にはしやいでゐるなか、そのひとだけは何か寂しように、皆と溶け合えないのを自ら寂しがつてゐるような風で、頬に物倦げな微笑を浮べてゐた。唇の間から微かに白い歯が覗いてゐた。それが——

なんとも言えない甘い感じで、私の眼に、否、心に迫つた。

「行こう」と友人が私に言つた。

「うん、まあ……」

つい今し方、椅子を立ち上りかけた私なのに、
「もう、ちよつと……」

と言つた。

黒いシャツに真赤なネクタイをした、小肥りした青年が、さつきから、やや道化めいた身振りで、椅子から椅子の間を泳ぐようにして歩き廻つていたが、花に顔を埋めたそのひとの横に來ると、何か一言二言そのひとに言つて、つと、そのひとの顔に手をのばした。何をするのだらうと私は秘かにどきりとした。彼は、そのひとの頬に手が触れんばかりにして、これはそのひとの頬に触れている花の一輪を無難作に、というより残酷に摘み取つた。そして得々とした表情でその花を自分の背広の衿に挿した。

私はひどく切ない想いでその青年を見据えていた。左様、私にはそのひとに關聯して、その青年に、義望なり嫉妬なりを感じ得る資格といつたものは何も無いのだつたが、そのとき私のうちにこみあげてきた切なさによつて私は、はつきりとそのひとへの哀しい慕情が例の傷口を通して私の心のなかに滲み通つて行つたことを知らされた。

そのひとへの恋の芽生えは、こうしてこの時私のうちに生じたのである。

気がつくつと、そのひとは、紅茶の茶碗を唇に

当てながら、そつと——（私には正しくそう思われた。）そつと私を見ていた。切ない感情から顔を蒼白にし、切ない感情を眼にいつぱい漲らせて、かの赤いネクタイの青年を見据えていた、その私を——。

我にもあらず頬の赧らむのを私は覺えた。前にもいつたように恋の経験のまつたく無い私であつたから、そのひとのそのひそかな視線が何を意味するか、或は将来何を意味することになるか、自惚れの判断はもとより冷静な推察すらなし難いのであつたが、そういうことをすつかり抜きにした自然の作用として、なんともいふような喜び、生命的なともいへばいい純粋な喜びを、私はやはり感じずにはいられなかつた。

しかしすぐ悲しみが待つていた。劇団の人々と一緒にここへ來てはいるものの、浮かれはしやいだそのグループとは一眼で違ふらしいと分る、冷やかな表情をした青年紳士がひとり、座に加わつていたが、不意に椅子から立つと、そのひとの傍へつかつかと、私をこの上なく悲しませる親しさと一種の威圧的な傲慢さで、歩み寄つた。そして、冷やかという以上の苦り切つた顔を、そのひとの顔に近づけ、手入れのとどいた短い髭の下から何か言つたと思うと早くもそのひとの肩に、さあ出ましようと言令するような手を置いた。

そのひとは素直に椅子を立つた。見るからに高価そうな（おとおのさもし眼よ）瀟灑な

外套を着た紳士は、私が意外と驚いた素直さで席を立つたそのひとを、なおも急ぎ立てるやうに、なれなれしく腕に手をやつた。そのひとは、そうした紳士の顔に、——それはすぐそのひとの顔の横にあつたが、改めて、しかしそのひとらしく軽く慎しく、抗議するような眼をちらと向け、そうしてその眼を伏せると、腕を紳士にまかせたまま、

「では、みなさま、お先に——」

そう挨拶して、出口へ二、三步行きかけたが、中途で急にとまると、それまでのそのひとは別人のような荒々しさで身をかえし、胸にそれまであんな嬉しそうにかかえていた花束を皆の方にぐいと乱暴に差し出して、

「これ、みなさままでお分けになつて……」

側のテーブルに投げるように置いた。そうしてやや啞然とした皆にくるりと背を向けると、今度は颯と走るようにして去つた。

そのひとは、私の方を見向きもしなかつた。ゆつたりとしたオーバーの下、すらりとのびた美しい脚を、私の網膜にくつきりと刻みつけただけで……。

私はここでそのひとの美をもうひとつ見出し、ていた。拾つていた、と言ふべきかもしれない。「ええ面白くない！」

頓狂な声を挙げたのは赤いネクタイの青年だつた。衿の花を、えいと引き抜くと、床に投げた。そして慌ててまた拾ひ上げて、花弁についた泥を、指で弾いて払おうとした。

花卉が脆くハラハラと散つた。

*

今もつて忘れることのできないその夜の恋の芽生えも、その直後の私には、何か現実のものならぬ夢のようなこととして見過さねばならぬのであつた。夢ならぬ現実の恋なのに、恋の如きを追いもとめることはその頃の私には許されなかつたのである。そうしたその頃の私の生活については、あとで語る時もあるだろう。今はその後の思い出を点綴するそのひとの姿を思い描いて、話の歩みを急がせることにしよう。

その夜から幾月ほど経つてのことであつたか、毎月の金を貰いに本郷の蒲原の下宿へ訪れると、彼はちやうど外へ出るところだと言ひ、

「今日はA学院の記念日なのだ。どうだ、一緒にやつてみないか」

A学院！ 私は危く口に出して言うところだつた。男女共学の自由な学院として有名なA学院の高等科の、——そのひとは、学生なのであつた。もうすぐそのひともそこを卒業する、——そうしたことまで私はいつか蒲原からそれとなく聞き込んでいた。蒲原の劇団というのはその学生を主なメンバーとして、そこを背景として組織されたものであつた。そこには美術科もあり、例の赤ネクタイの青年はその美術科に籍を置いているのだが、そういう画学生が舞台装置をひきうけ、音楽科の学生が効果を受け持つという塩梅であつた。そう言えば、帝国ホテル

ルでのまるでその学院の学芸会のようなあの夜の芝居は——（廊下の華やかさは学院の女学生が殆んど総見のようにして来ていたからであつた）。蒲原がその芝居でひとつ儲けて運動資金に提供するとやつていたにもかかわらず、予期に反して儲けがなかつたのか、その後蒲原から何んの話もなかつた。私も、かつての同志だつた蒲原のそんな言ひ草は運動からの脱落の一種の口実だろうと思つて当てにしてはいなくなつたが。

「この頃、学院には研究会が出来ているんだ」春の気配の漂ひ初めた街に出ると、蒲原は声をひそめてそう言つた。シンバを獲得したらどうかと言うのであつた。

「僕が当つてもいい」

「頼む。すこしまとまつた基金が要るのだ」

と私は言つた。私は青年同盟の機関紙部に属してしたが、苛酷な弾圧で運動が困難を極めるとともに紙代の集まりが思うように行かず、印刷代を私たちの手で工面せねばならなくなつた。

私は蒲原の言う研究会に、半信半疑ながら期待をかけた。そしてそれを口実にして、（蒲原の「口実」をあざわらつた私がいつか自分も口実を設けているのに気付かず）私はA学院へ行つた。

その校庭で直ぐ私は、その人の姿を再び見る事ができたのであつた。憧れのそのひとは、下級生の女の子と一緒になつてバスケット・ボールに興じていた。なんという楽しそうなその

ひとの姿だつたらう。楽しさがそれ自身美しさとなつてそのひとの美にさらに輝きを加えているのだつた。若草の萌え初めた校庭を春の牝鹿のように軽快に嬉々として飛び跳ねているそのひとの全身からは、まぶしくて直視できない輝きが溢れこぼれていた。寸時も停まつていないその敏捷な脚から、ボールと共に颯やかにのびされたその手から、笑いながら然し真剣にバスケットを狙うその愛らしい顔から、神秘的なその胸の隆起から、そのスカートの大胆なひるがえりから、——楽しさが美の輝きとなつて潑刺と放射される。若い生命の輝き、青春の輝き。私はその輝きに打たれたがら、自分の日常がいかにこうした楽しさから遮断されたものであるかを今更ながら知らされたのであつた。

校庭の若草さえが、そのひとの足に踏まれながら、むしろ踏まれることによつて、楽しそうであつた。踏まれても痛くない、そう思われるそのひとの軽やかな動きであつたが、痛くても私はその若草のようにそのひとの足に踏まれたい……そんな想いが熱く胸に湧き立つた。私は自らのうちにそれまで忘れられていた青春を感じた。

もしやわれ草にありせば
野辺に萌え君に踏まれて
かつ靡きかつは微笑み
その足に触れましものを

私はこの藤村の詩を思いおこす。その時この詩を思い浮べたのではなかつた。詩などは読んだことのない私であつた。詩の如きを私は軽蔑していた。しかも私のうちに詩の言葉でなく、詩そのものが湧いていたのだ。詩とともに私の軽蔑していた青春というものが、楽しさというものの、美への憧れといったものの、——それらが私のうちに石の下のように萌えて来た。

そのひとは楽しい遊びをやめると、のけぞるような恰好で手を挙げて、乱れた断髪をなおしながら、真直ぐ私の方に向つて歩いてきた。またびよんびよんと跳ねながら、そうしてなまなましくなまめかしく波立っているその胸を私の眼にあたかも差し示すようにして——。私は狼狽した。シャワー室の前にそれを知らずに私は立つていたのだが、強い風を真正面から受けた時のあの息苦しさを覚えた。

そのひとは私を認めた。誰だつたかしら、——そんな眼を私に注いだがすぐ、あの芝居の夜、銀座のレストランで見た男と分つたようであつた。その早さは私を喜ばせた。だが喜びを感じずるとたちまち、なんとしたことか、私はまるで喜びと反対の悲しみに襲われたかのように面を伏せ、そそくさとその場を立ち去つた。深い慕情の故の羞恥であつた。そうしてそのひとから離れると私はほんとうに手ひどい悲しみに打ちのめされた。悲しみのなかで然し私は、——そのひとが銀座で初めて見た時のどこか物倦げで憂愁の翳さえ感じられたのと今日はまるで違つ

て、晴れ渡つた空の如くに快活で健康的なのを、何かそれが私にとつて大変重大な事柄でもあるかのように深く喜びつつ、蒲原が学院の男の学生と一緒に笑い興じている方へ歩いて行つた。その群のなかに、私はあの夜の赤ネクタイの画学生を見出した。

「——左近君」

と蒲原が私に紹介した。左近はその日も派手なネクタイをつけ衿に花を挿していたが、そわそわと動き廻るのもまた、芝居で昂奮したあの夜だけのことではないのだつた。眼も絶えず動かしつづけていたが、その眼が校舎から出てきたひとりの女学生を、ふと捉えたと、

「そうそう、トンちゃんに言うことがあつた」

そう呟いて、

「トンちゃん、トンちゃん！」

あたふたと駆け出して行く左近の後姿に、

「あれは華族のお坊ちゃんだが……」

蒲原がそう私に囁いた。だが？ どうだというのだろう。尋ねようとしたときそのひとが、いわば私の避けたそのひとが、そのひとの方から私のところへ近付いてくるのを見た。何か吃驚したような丸い眼を見張つて、しかもその眼を私に直線的に注いで、——吃驚した私がほんとうに吃驚した丸い眼でそのひとを見ても、そのひとは眼をそらすことなく依然として私に注いで……。

「蒲原さん、今日は」

眼をそらせていた私は、そのひとのこの明る

く爽かな声を耳にすると、声に向つて眼を移した。すると、どうだろう、そのひとの眼はまだ私の上に注がれているのだつたが、間近で見たその眼は、そうだ、また犬の喩えを持ち出せば、花園に迷い込んだ犬に、どここの犬だろうと花園の若い女主人が呆れたような眼を注いでいる、そんな眼であつた。こつちの気持などすつかり無視した、驕慢で不敵な、そしてあの育ちの良さを思わせる我儘なものが、その眼に、その態度にありありと出ていた。そうしてある種の挑戦と反感と侮蔑とを現わしているようにも取れた。そのひとは、その日、終始私に対して、その無視の態度をつづけた。

——そのひとを、蒲原は私に紹介しようとはしなかつた。

*

私はA学院にグループを作することに成功した。そして機関紙の費用を富裕なその学生グループに作つて貰うことになつて、ある日、それを受取るため、お茶の水の省線の線路に沿つた坂道を歩いていった。そこを連絡の場所に選んだのである。神田川の崖には草がすでに眼のさめるような青さで生い繁つていた。その新鮮な緑は私に、私も今度は大分「寿命」が永い……と、なんともはや散文的な感慨を催させていた。

（しかし今度は、——つかまつたら今度はもう送局だろう）

電車がガーツと眼下を走つて行く。その窓の

ひとつひとつに、さまざまな人の姿が覗かれ、さまざまなその人々がしかししみな一様に、いかにも安らかな生を楽しんでいる風な、のどかな感じなのが、映画の一齣のようなひとつひとつの窓の進行と共にひとつひとつ、私の眼に沁み込んだ。いつ捕えられ投獄されるか分らない危険に身をさらしている自分を私は決して愚かしくは思わなかつたが、否それどころか、悲愴な献身の感情に氣負つていたのだが、それでも春らしいのんびりした人々の姿はやはり私の心を刺した。理論で支えているだけの私の闘争精神に、疲労と弛緩が生じていたのだろうか。

(——あのひとも、もう学院を卒業したなあ……)

すると、まるで作り話のようだが、そのひとの姿が幻影でなくほんとうに坂の上に現われた。ハイヒールをこつこつと鳴らして降りてくるそのひとの颯爽とした姿を私が認めたときはそのひととまた、私の、——さて、なんと形容したらいいか、颯爽？ 飛んでもない、しかしまあ、一種颯爽としたとも言つて置こうか、とにかく私の姿をたしかに向うも眼にしたようであつた。

——そのひとを蒲原は紹介してくれなかつたが、あとで画学生の、「華族のお坊ちゃん」の左近が私に紹介してくれたので、もう私たちはこうして道で会えば挨拶を交していいい間柄であつた。まして、氣附かずに通り過ぎるということの有り得ない、ひとげの無いこの道だつたが、

そしてそのひとと二人だけで話をしたいとあんなに願つていた私なのに、その時の私は、ああまたしても、眼をそらせるときりげない風を装つて道の端に行き、そのままそのひとをやりすごそうとした。連絡のことを考えたからか。それなら立ち話はよして、せめて挨拶だけでもして通りすぎればいいではないか。この間、犬のように無視された怨みより募情の方が強いはずだつた。そうだ、またしても余りにも深い募情の故の内攻的な羞恥のせいだつた。

私は全身を耳にして、そのひとのこつこつという可愛い(そんな音にまで私は愛情を掻き立てられるのだつた。)——私の耳のみならず全身をくすぐるようなその靴音が、刻一刻近付いて、そうして空しく去つて行くのを聞いた。と、その時、

「木村さん。……」

思い掛けないそのひとの声だ。そのひとが私を背後から呼び留めたのだ。しかも、木村というのは学院のグループの中で私の使っている、グループだけしか知らない私の愛名であつた。左近がそのひとに私を紹介した時の、木村とは違つた名を、そのひとは使わなかつた。

私は痴癡のように立つていた。

「どうして、あなたはそう、いつもわたくしをお避けになりますの？」

そのひとは私に言つた。

「あなたは、わたくしのような者をお嫌いなのね。軽蔑していらいしやるのね」

「いや……」

「いいんです」

そのひとはあたりに眼を配りながら、すでに半開きにしたハンドバッグから手早く分厚い封筒を取り出すと、

「これをどうぞ」

「……………」

「お約束のお金です、連絡を言いつかつて、わたくし、参りましたの」

「あなたが……」

「では、——お大事に」

そのひとは、やさしい、いや悲しい微笑を残して、去つて行つた。

その二

またしても、ここへ私は来た。

ここへ、そのひとはこの前も遂に姿を現わさなかつた。今日も、だから、もしかすると私の願いはまたもや報いられないかもしれないのだが、今日もまた(或いはまだ)駄目かもしれないとそう自分で考えることは、しかし、そのひとのここへ来ることを今ではもう諦めかけているとか、今ひとたび会いたいとする私の願いが、幾度か徒勞に終つたことのためようやく薄らぎかけてきたとか、そういうことでは、さらさら無くて、かえつてそのひとにどうしても、どうあつても会いたいとする私の想いがいよいよ強く激しく燃え立つてくるとは、思えばなんと悲

しい私の心であろう。愚かなほど悲しい、——しかし、ある意味ではどうしてなかなか立派だと私は秘かに自分を褒めてやりたい気持ちもある。こういう心を言葉にすると、なんというのだろうか。諦めのつかない心——未練という言葉が、ふと浮んで来たが、これとはまた少しく異なる私の心のようだ。けれど、未練といえ、これこそほんとうに悲しく辛い、いやな思い出だが、ひとつ、思い出されることがある。

召集されたばかりでまだ内地の兵営にいた頃だ。そのひとの写真を肌身離さず抱いていたのを、ある時、見つかつてしまつて、

「喉か」

と問われ、その言葉の卑しさに口がきけず黙つて首を横に振ると、

「じゃア、情婦か」

ふふんと相手は鼻で冷笑をして、

「情婦なら情婦とはつきり返事をしろ」

頬を私はいきなり殴られた。そして——情婦でありますと直立不動で答えてみると脅迫され、私は痛みのため口がきけない感じだったが、ちょうど犬が噛めない骨を与えられてあぐあぐやる、あんな口つきをしてやつと、

「情婦ではないのであります」

「そんなら、なんだ」

「……………」

「返事をせんか。この野郎！」

「はッ。恋人であります」

「恋人？」

何をぬかしやがると理不尽な打擲が又もや私の頬に來た。つづけさまの打擲の間に、その暴力のかたまりのような魚屋は、いや、そのどんな暴逆な野蛮な行為にも新兵の私の身としては絶対服従をしなければならぬ班長の軍曹は、しやら臭えとか、生意気なとか、このひょうろく玉とか、如何にも魚屋的下司な捨科白を挟んで、

「恋人と情婦と、どう違うんだ。言つてみる」

違ふ。断じて違ふ。しかし何か言えば言うだけ殴打されるにきまつているから、私は向うの欲するとおり、

「情婦であります」

と言つたのだ、それで、その軍曹、いや暴漢の殴打から免れるとしたのは浅幕であつた。帝国軍人ともあろうものが、情婦の写真を持つてゐるとは何事かと言つて、相手はさらに威丈高になつて私を殴打した。彼はあたかも私がそのひとの写真をただ単に持つてゐるということによつて彼にひどい侮辱を与えたかの如く激怒し、彼の言を借りれば帝国軍人ともあろうものが、ごろつきのように、否けだもののように猛烈狂つて、まったく無抵抗の私に対して殴る蹴るの残虐をほしきままにしたが、事実は私の方こそ彼によつて心を裂かれるに等しい侮辱を与えられたのである。殴られ蹴られる肉体的侮辱より、心に与えられた侮辱の方が大きかつた。しかしその侮辱に対して新兵の私は彼のように激怒し猛烈狂うということは許されなかつた。

「女々しい野郎だ。情婦の写真など持つてやがつて、——土性ツ骨を叩き直してやる！」

私はそのひとの、——恋人の写真を持つてゐることを少しも女々しいという工合には考えなかつたけれどそんな抗弁をしたらそれこそ殺されかねないので黙つていたが、今も女々しいとは考えない。そのひとを十何年にわたつて綿々と想いつめてゐることを、私は少しも女々しいとは考えない。むしろ最も男らしいひとつの強さだとさえ考えてゐる。

そのひとを、私は恋人であつて、情婦では無いとしたのは、そのひとを汚辱するような情婦という野蛮な言葉を私が嫌つたからというだけではなく、そのひとと私との間には、——こういうことを言うのはそのひとのみならず私自身をも汚辱するような感じが出来たら避けたいのであるが事情をはつきりさせるべくあえて言うならば、情婦という言葉から直ちに聯想される情慾、または肉慾、——そのようなこと、それに纏わる事柄はかつて存在しなかつた。もつとはつきり言うと、肉体的關係といつたものは二人の間に遂に無かつたからなのである。情慾を不具者の如く無視したり星輩派とともに輕蔑したりする私では決してないが、恋愛と情慾とを明瞭に區別したい、すなわち恋愛の完成は肉体的愛情へと自ずと導かれるものではあらうがしかし初めから情慾と混同してゐる恋愛は取らない、情慾と混同しない恋愛というもののそれ自身美しく高い価値を認めたい、そういう私の氣持

で、その気持から言うと、そのひとは永い間の私の恋愛の対象であつた。私の言う恋人とはそういう意味で、これは私の勝手な解釈かもしれないが、情婦となると情慾の対象という工合に區別して考へてゐる私は、恋人と情婦とどう違ふのだと言つて私を殴つた魚屋上りの軍曹の言葉は、つまり情慾との區別を考へない日本の今までの低劣で卑賤な戀愛觀をそのまま現わしてゐるものとも思ふのである。ということは、戀愛といふものが果して日本にあつたろうかという、やや極端に走るかもしれないが、そういう疑問となつて私に迫る。情慾が無かつたのではないか。——私が自分を断じて女々しくないと自負し、そのひをいつも変らぬ熱情で想いつづけたことを逆に男らしいひとつの強さとして誇りたいのは、情慾によつて結びつけられたそのひではなくまたそのひを情慾の対象として未練たらしく追ひ求めている私ではなく、純粹な少しも酬いられることのなかつた戀愛感情で、ただそれだけで私はそのひを想いつづけて来た、愚かなやうで私には尊いその事実からなのである。その精神の持続力を私は女々しいとは思へないのである。しかしそうした精神力、そうした熱情も、戀愛と情慾をこつちやにする者からは、情慾にもとづく未練とされる。

「さあ、未練を絶ち切つたか」

兇暴な軍曹は殴打に疲れるとそう言つて今度は言葉で私を苦しめた。兵舎の廊下に叩きのめされた私の、歟油臭い板の間にびたとくつつい

た頬を、彼は靴でこづいて、

「起きろ。起きて返事をせい。返事を……」

「はい」

切つたと言わねばならないのだが私にはそんな嘘は言えなかつた。そのひとへの愛情を絶ち切れと殴られれば殴られるほど一層そのひとへの愛情が高まつてくる。そうしたそのひとに対して、かりそめにもせよ、嘘は言えないのであつた。永い間そのひとに捧げて来た愛情をどうしてこれしきのことと、——否、これしきどころではない、ひどい苛まれ方ではあつたが、しかし、どうしてこれで絶ち切るなどが出来ようか。私はよろよろと立ち上つた。

「返事をせんか」

「は……」

この時、その獯猛な軍曹の靴の前に落ちてゐるそのひとの写真が私の眼に映つた。獯猛な靴が今にもそのひとの写真を、——そのひとを踏もうとしてゐる。私は叫んだ。

「切つたであります」

「ふん、何を切つたのだ、はつきり言え」

人間をなぶることの快感に酔い痴れた顔である。

「班長殿の仰せの通り、未練を絶ち切つたであります」

「何の未練だ。情婦なら情婦と、はつきり」

「は。自分は、——情婦から未練を絶ち切つたであります」

私はそのひとの写真を返して貰いたいばかり

りに、屈辱に堪へ嘘も言つたのであつたが、
「よし。未練を絶ち切つたな」

軍曹はそう言うと、汚いものでもつまむような手附で写真を拾い上げて、あたかも得難い美酒を呑み乾した人がその盃を打ちくたくように、「絶ち切つたのなら、こんなものはいらん」

ビリビリと私の面前でそのひとの写真を引き裂いた。おうと私はうめいた。次の瞬間、軍曹の胸倉に飛びかかつてゐる自分を見出した。こんなことなら初めからなぶられ殴られてゐるのではなかつた。私はその時その男を殺してしまおうとさえ思つた。——私は當倉に入れられた。

そうだ。私は順序を追つて私の愛の歴史とも言うべき思い出を語るべきであつた。語る——誰に？ 私自身に、私の心に語ろうというのである。そうしてそのひとへの私の愛情はどういうものであつたかを、そのひとに会う前に、そのひとに会おうとしてこうしてここで、銀座の一角で待つてゐる間に、自分でもう一度明らかにしてみようと思ふのだ。

私はそのひとの家の前に立つてゐた。

大森の駅から遠くない高台の新しい市内といへる古雅な落ちついた雲囲氣の中に、いづれも宏大な邸宅が静かに立ち並んでいる一郭に、その家はあつた。大きな樺の蔭の石の門柱には「都築」という表札が出ていた。